

第十四章 寛容と忍耐

池田新内閣の第一の使命は、安保騒動で荒んでしまつた世相と人心を收拾して、これを建設的な方向に転換することであつた。そのためには、総選挙で公約した所得倍增構想の政策化を急ぐ必要があつたが、政府はその前に、より緊急に解決しなければならぬもう一つの問題を抱えていた。三井三池炭鉱の争議である。

石炭から石油へのエネルギー転換の進行によつて、当時、石炭産業は深刻な不振に陥り、三井鉱山は六千人にのぼる人員整理を行おうとした。これに対して三池鉱業所中心に、昭和三十四年初頭から争議が始まつていた。翌昭和三十五年一月、会社側の全山ロックアウトによつて事態は急激に悪化し、池田内閣が実現する少し前の七月五日と七日には、会社側が機帆船で第二組合を作業場に送りこもうとするのを第一組合が阻止し、投石、放水、打上げ花火等で約三百人の負傷者を出すという緊迫した事態にまでなつていた。だが、この間、岸内閣は安保騒動のため、ほとんどこれに対処することができずにいた。

一企業の労使間の争いの域を超えて、総資本対総労働の対決とまで言われる大きな政治的、社会的問題となつたこの争議をいかに解決するかが、新内閣の試金石となつた。池田は、これに強い熱意を示し、首班指名を受ける前から、大平の推挙により労働問題に造詣の深い石田博英を労相に起用することを決めていた。

新内閣が成立するやただちに、石田新労相は中労委に対して職権斡旋に乗りだすよう要請した。労使双方の強硬な態度

に、中労委の斡旋は難航をつづけたが、石田労相の、人命尊重はすべての論議を超えた問題、というねばり強い説得が効を奏して、労使はようやく話合いの椅子につくことになった。この間大平官房長官は、東京商大時代の友人で、当時労働省労政局長をつとめていた富樫総一と綿密な打合せを行うほか、首相、労相に太田黨総評議長、原茂炭労委員長を加えた調停の会議を主宰し、また財界の理解を取りつけるなど、多面的な活動をつづけた。

中労委の最終斡旋案は、八月十二日に会社側によって、十八日には炭労側によって受諾され、さしもの争議もここに解決を見た。新内閣成立一カ月後のことである。

「新内閣の初仕事は、かくて一応の成果を収めえたのである。」（『春風秋雨』）

こうして新聞の紙面から、安保騒動以来つづいていた血なまぐさい事件が消えた。そこへ打ち出されたのが新政策である。大平官房長官は、所得倍増の政策をより具体的な政策とするため、大蔵省の下村治、宏池会事務局長の田村敏雄（故人）、そして、各官事務当局の少数メンバーとともに新政策体系の作成にとりかかった。問題となったのは経済の成長率であったが、池田首相は、九月一日の政府・与党会議で、「向う三年間年九%」の線を最終的に裁定して、新政策の根幹を決定した。

九月五日に発表された新政策は次の九項目にわたっている。すなわち、

- (一) 民主政治の擁護と行政の刷新
- (二) 平和外交の推進と安全保障体制の確立
- (三) 経済成長政策の推進と完全雇用の達成
- (四) 一千億以上の減税
- (五) 社会保障の拡充
- (六) 農林漁業基本政策の確立

(七) 中小企業の近代化

(八) 文教の刷新充実と科学技術の振興

(九) 青少年対策の推進

である。

大平はこの新政策について、のちに、次のように記した。

「……この新政策は、善きにつけ悪しきにつけ、真剣な論議に値する若干の特長をもっていたと思う。その一つは、寛容と忍耐の精神を政治運営、とりわけ国会運営の基調として持込み、人事管理体制の確立を行政刷新の軸として特にとり上げたこと。その二は、内政と外交の一体化を政治運営の基本として、強調したこと。その三は、向う十ヶ年にわたる所得倍増計画を経済政策運営の指針として採択したこと、さらには第四として、経済成長に伴う政府の任務を経済基盤の強化、産業構造の高度化、人的能力の開発、社会保障の拡充に指向したこと。そして道路、治山治水、港湾等の長期計画、農業基本法の策案等に見られるように、重要な政策を長期的展望の中に位づけようという意欲を明確にしたことである。」(『春風秋雨』)

ところで、大平官房長官は、特定の範囲を除いてまた多くの人には知られざる政治家で、新聞記者の中でも、池田派を担当したことがあるもの以外は、大平をよく知らぬものが少なくなかった。

その大平を組閣翌日の『朝日新聞』(七月十九日「新閣僚の横顔」)はこう紹介した。

「見るからに秀才型の多い大蔵官僚出身には珍しく、見てくれが鈍重なタイプである。東京商大のころは陸上競技の選手もやったというが、そんな感じはでっぶり太ったいまの姿のどこにもない。一体、何を考えているのか、ちっともわからん」という人も多いが、それでいて親分池田氏の信任は厚く、池田氏の総裁立候補の声明文も書いたりしている。池田総

裁が決まる前から早くも、大平官房長官確実がとりざたされていたくらいだ。それに、岸前首相や河野一郎など他の派閥の親分衆からも買われており、どこにそんな魅力が潜んでいるのかと不思議がられたりする。

だから、見てくれのヌーボーは一種の政治的なポーズで、どうしてなかなか抜け目のない動き方をする。見かけにだまされて油断はできない」との評も出てくるわけだ。

一般に小ツブの才子が多いといわれる池田派の中では異色の政治家であることは間違いない。そんな持ち味が官房長官となつてどんな具合に発揮されるか興味のあるところだ。

しかし、新官房長官との接触が深まるにつれて、記者たちの大平に対する印象は変わっていった。

当時、官邸記者クラブに所属していた『産経新聞』の阿部穆記者（現政治部長）は次のように言っている。

「大平さんは、電話で送稿するのには、きわめて便利な話し方をしてくれました。ちゃんと『前書き』があつて、次に本文に入るといふようなかたちでね。それと、英語がよく出るんですよ。『明日は日曜日ですが、官房長官の予定は？』。

『いや、明日はありませんよ、ノンポリティカル・ホリデーですよ』という具合で、まず、大平英語で有名になつたんじゃないですか」。

『朝日新聞』の柴隆治記者（現政治部長）は、はじめて大平に会つて名刺を出したが、大平から会談中に、名刺を見ながら、何度も、「柴君、柴君」と呼ばれたことを記憶している。「ああやつて、名前を頭の中にたたきこむんだ。覚えることだな、と思ひました」と柴は語る。

官房長官の会見は、国会開会中は院内の大臣室前小部屋で、閉会中は官邸の玄関脇の小部屋で行われた。加盟各社の記者室、会見室のほか、内閣報道室、写真室、食堂等を備えた現在の官邸別館（新聞記者会館）は、昭和三十七年一月に着工され、七月に完成したものであり、記者たちはこれを池田・大平の『善政』と呼んだ。

大平は、その在任中、内閣のスポークスマンという官房長官の立場について、こう語っている。

「実は私もビクビクしとつたんだが……ええ、そう、長官になる時にですな。なにか、こうエライ圧力がかかるんじゃない

いか、とね。とにかく新聞記者はたいへんな力を持つてるんだから、その点は権力者と似たもので……。こわいんですなア、みんな。ところが、そのウ、なってみると、みんな実にキレイなんですな、いや驚きました。

記者会見ですか、あれは勉強になりますなア、苦痛と思つたことないです。質問に答えながら考えも整理できるし、こちの気づかんことも教えてくれる、アツ、あしたはあれをしなけりゃいかな、と思いださせてくれたりね。まア、毎日のおサライですな。こつちばかり損するってことないです。

……いや、私こんなに笑いながらしゃべってますがね、記者諸君と会う時はいつも真剣勝負の気持ちですよ、ほんとのところ。』（『朝日新聞』昭和三十六年十月一日付）

しかし、官房長官の激務をぬって、一日実質的に六回（朝駆け、定例会見三回、夜十時半の夜まわり記者との懇談、そして茶の間組と称される親しい記者への応対）の応接が、肉体的にも精神的にも決して楽なはずはない。しかも、夜中の一時頃に記者たちが帰ると、大平はその後で、池田総理との打合せに信濃町へ出かけた。門がしまっている時は、警備の警官の手をかりて塀を乗り越えて邸内に入り、池田夫妻の寝室まで入ってその日の重要案件について相談し、帰ってきてちよつとウトウトすると、朝駆けの記者がもう来ているという具合だった。

だが大平は、持ち前の忍耐力で、全く嫌な顔を見せずに、記者たちに応対した。それは何よりも、彼が、安保騒動後の世論の動向をきわめて重視していたからにほかならないであらう。彼は、記者に正しく伝えると同時に、記者から知ることにつとめたのである。

むろん官房長官の仕事は、記者への応対だけではない。大平自身、こつち書いている。

「官房長官は、多忙な職務である。内政、外交全般にわたり、絶えず目を光らせ、神経を働かせていなければならぬ。国の内外を問わず、また昼夜を分かたず、何か重要なことがおこると、政府を代表して直ちに対応しなければならぬ。また、政府各部と与党には、全幅の協力をとりつけねばならず、野党、報道界、労働界はもとより、学界、教育界、芸能

界、スポーツ界とも折り合いをよくして行かねばならない。あらゆる変化に対応が求められる柔軟な姿勢が必要で、硬直してはいやっつけていけない。だから官房長官は自らが無でなければ、当意即妙な対応ができるものではない。

私はまず、自分の机の上や、引き出しの中に一切懸案をもたないように努めた。問題が起きると時をおかないで、どの誰に処理してもらおうかを考えて、即座に始末した。そして、このように処理してもらいたいという注文はつけないで、相手が処理して得た結果には、多少の不満があっても、それを尊重するように心がけたものである。」(『私の履歴書』)

解散、総選挙を目前に控えた昭和三十五年十月十二日、公明選挙連盟主催の日比谷公会堂における三党首立会演説会で、社会党の浅沼委員長が凶漢の手によって刺殺された。一瞬の出来事である。

総評はただちに抗議集会を開き、連日国会にデモをかける方針を決定した。大平官房長官は事態収拾のためには山崎慶国家公安委員長に辞任してもらおうほかはないと考え、浅沼邸に弔問したあと、目黒区洗足の山崎邸に赴く。夜になって大平は信濃町の池田邸を訪れ、そのあと山崎もやってきて、善後策を打ち合わせた。

大平は、その夜のうちに事を決しなければならぬと説いた。池田首相はなかなか慎重で賛成しなかったが、結局、翌日の臨時閣議で山崎公安委員長の辞任が決まった。

十月十七日に開会された池田内閣初の第三十六臨時国会では、冒頭に池田首相の浅沼追悼演説が行われた。

ついで二十一日に、新政策の内容を基調とした施政方針演説がなされた、むろん大平がその草稿を執筆した。

「施政方針演説は、各省庁より出てきた資料を駆使して内閣官房長官がそのとりまとめに当る。もちろん与党の意見を徴した上、総理が所要の改訂を施し、最終的には閣議で決める。肝心なことを細大洩すまいとすれば繁文冗長になるし、次元の高い雄渾なものにしようとするれば、その際省いたところが後で問題になったりする。簡略に流れず冗長に墮せず、しかも一つの思想をもって貫こうとすることはむづかしい。また平易な文章を選べば不真面目だといわれ、荘重な文章にすれば中身が伴わないと非難される。どうやってみてもうまくいかないものである。」(『春風秋雨』)

各党の型どりの代表質問ののち、二十四日、国会は解散された。

この総選挙では、テレビによる党首討論会が最大の話題となった。あたかもアメリカではケネディ対ニクソンの大統領選挙が進行中で、ブラウン管上では華やかな応酬がくりひろげられており、NHKもこれにならったのである。

十一月十二日、ケネディ当選が告げられた直後、池田勇人自民党総裁、江田三郎社会党委員長代行、西尾末広民社党委員長三人が、評論家唐島基智三の司会で討論に臨んだ。この企画が好評だったので、つづいて、第二弾として、大平正芳官房長官、成田知己社会党政審会長、曾禰益民社党書記長のテレビ討論が行われ、大平官房長官の姿を国民一般に印象づけた。

十一月二十日の選挙の結果、自由民主党は解散時の二百八十三名が二百九十六名となり、のちに無所属五名のうち四名が自由民主党に入党したので、議席は三百名の大台に達した。社会党は浅沼の弔い合戦ということで善戦し、二十三名増の百四十五名、民社党は四十名から十七名へと激減した。

大平は、官房長官という職務上ほとんど選挙区へ帰ることができなかったが、二十二歳になっていた長男の正樹が、父にかわって立会演説を行った。画板に原稿をのせ、一枚ずつめくって読んだ。会場では、まだ若いのに、と涙を流しながら聞く聴衆もいたし、控室では、同僚立候補者から、「お父ちゃんが偉くなったのでたいへんだね」とねぎらいの言葉をかけられた。

開票の結果、大平は二位の加藤常太郎に二万二千票の大差をつけてトップ当選した。いまや彼は、郷土の輿望を担う政治家となっていたのである。

内閣の要をあずかる官房長官として最も苦心するもの一つは党内対策である。大平が全力をつくしたのは、第一次組閣で締め出された河野一郎が分党などという無謀な行動に走らないようにすることであった。彼は河野対策に腐心した。

この頃、大平は親しい記者に持説の「楯円論」を持ち出して、池田内閣を安定させつつ事を運ぶには、河野と佐藤を

二つの焦点として、精円全体のバランスをとることが必要だ」としゃべっている。

しかし、池田総裁の実現に大きく貢献した佐藤栄作にとつて、池田・大平コンビの河野対策には不満があった。大平は、佐藤がいずれ池田の後を襲うのは順序でもあり、保守本流の筋でもあると考え、佐藤を尊重する気持を変えなかつたにもかかわらず、佐藤の方は大平に不快感を抱くようになった。

議長問題でもめた組閣は、十二月八日どうやら終わったが、三百名もとつた直後としては、池田は手際が悪いと批判された。河野派、三木派からも人が入って、よく言えば「拳党内閣」、悪くいえば「派閥均衡内閣」ができた。大平は官房長官に留任した。

大平官房長官は、もうこの頃、テレビの記者会見などを通じて一般にも次第に知名度があがっており、政治家の人気投票などでもかなり上位に上がるようになっていた。そしてNHKでは、翌年（昭和三十六年）の正月九日、大平を人気番組「私の秘密」のゲストに出演させる企画を立てた。番組の趣向は、「私たちは同じ大学の合気道部員で、父はそろって池田内閣の閣僚です」というヒントで、小坂善太郎外相、吉井喜実厚相、安井謙自治相の子息、そして大平の長男正樹が登場した。大学は慶応義塾。正樹だけがOBで、あと三人は在学中。大平がこのあとにゲスト出演したのである。

さて、池田内閣になってから経済企画庁が中心になって立案作成を急いでいた「国民所得倍增計画」は、昭和三十五年十一月一日に経済審議会会長石川一郎の名で答申が出された。答申を受けた政府は、これをほとんどそのまま採用し、十二月二十七日に閣議決定して、昭和三十六年度予算に織り込むことにした。

大平は、所得倍增論が「計画」となることについて若干の疑念を抱いていたらしい。彼はこう語っている。

「所得倍增論は、日本の置かれた状況で、日本人の知恵と労働、技術、貯蓄力をうまく利用していけば、十年間に実質所得が倍にならないはずはない、ということなんだ。

池田内閣ができたときにそれを所得倍増計画というものにした。ぼくは計画経済じゃないので、政府の計画にするのは間違いだ、政府が政策を実行する場合のひとつの鏡にしておいて、その鏡を見ると政府の施策の良し悪しがわかるんじゃないかという、鏡にしようじゃないかということだった。しかし、どうしても本人（池田）が所得倍増計画を政府の計画にする、といいだしたわけですね。

……（池田内閣が）政治より経済、花より団子に国民の意識を振り向けるひとつの契機になったと思う。それはいい面も悪い面もあって、後世の史家はいろいろと評価するだろうけどね。（塩口著『聞書池田勇人』）

要するに大平は、政策とは流れの上にもまく事をのせて行くべきものであって、現実をムリに伸ばしたりちぢめたりするのは間違いだと考えており、所得倍増政策についても、この考え方に立つ意見を抱いていたのである。

ともあれ大平は、昭和三十六年の正月には、首相の施政方針演説を再び準備しなければならなかった。これについては彼自身が次のように記している。

「三十六年一月の再開通常国会における施政方針演説は、その後の池田政権の政策的方向を構造的に示したものであった。外交については、まず外交と内政との不離一体性を強調し、内政のあり方がわが国の国際信用を左右するものであることを指摘するとともに、いわゆる中立主義が幻想にすぎない所以を力説した。中立主義は、わが国をめぐる環境に対する具体的検討を怠り、わが国の国力が東西間の力の均衡に多大の影響をもつ事実を看過し、わが国の経済の繁栄が自由国家群との協調を第一義的な基盤とする事実に対する洞察力を欠く、幻想であるとした。この中立主義幻想論は、その後国会において激しい論争の種となったものである。

経済政策については、わが国の経済力の強い成長力に対する信頼と、その潜在的な力が歴史的な開花期を迎えておるとの認識に立って、いわゆる所得倍増計画という長期的展望の下に総合的施策を花々しく展開したものであった。しかしこれは国民全体の自由な創意とたくましい活動力によってはじめて可能になるものであって、池田さんがむりやりに国民に押しつけようとするものでは決してないと用心深く断っている。さらに労働の流動性と雇用の高度化をはかることが、今

日の経済政策の眼目でなければならぬと主張した。事実昭和三十六、七、八の三ヶ年間に新たに職業戦線に出発する新鮮な労働力は、実に五百万の多きに上ることが見込まれ、彼等に立派な職場が用意されなければならなかつた。また一方発展の遅れ、不完全展用の状態にあへく農林漁業や中小企業の近代化は、日本経済の近代化の道程において越えなければならぬ関所であつた。そして「いつの日か、何人かがこの問題の解決にメスを入れなければならなかつた」問題であるとして、この難問に立向う自らの使命感を表明している。このこともその後国会の内外において活発な議論をよんだものである。」(『春風秋雨』)

こうして順調に進んできた池田政権も、昭和三十六年一月の再開国会から、六月十九日の池田渡米までの約半年間は、一種の揺れもどしを経験する時期となつた。

まず、一月三十一日に、池田首相が社会党の代表質問に対して、「弱小国がいかによつとも、日本は中立主義をとらな」と「失言」し、抗議によつてこれを取り消した。

二月一日には、右翼の少年が、『中央公論』にのつた深沢七郎の「風流夢譚」を皇室に対する侮辱だとして、中央公論社長嶋中鵬二宅を襲い、家人二人を殺傷した。事件は、小倉警視總監辞任に発展した。大平官房長官は直ちに嶋中郎を弔問したが、この事件によつて、筆著深沢七郎と中央公論社を名譽毀損で告訴すべきだという意見が再燃し、池田首相や大平官房長官に、各方面からそうした要請がしきりとなつた。大平の苦惱は深かつた。

「いつ、どこで、何が起るか判らない。しかしそれが何であるうとも、政府は政府の立場で、自らの意見と措置を決めなければならぬ。内閣官房長官は、その場合、政府の目となり耳となり、頭脳となり口とならなければならぬ役割である。」

私は、この事件の收拾につきひそかに心を砕いた。事件自体の究明ももとより大切であるが、それは司直の手に委ねて然るべきだ、政府としては、冷静かつ沈着にこの事件の政治的收拾に当らねばならぬと考え、目立たぬよつに各方面の

有識者の意見を、それとなく、聴取したのである。

……刑法二百三十二条による内閣総理大臣の告訴は、もし告訴権を行使するのであれば、事件があつてから六ヶ月以内に行なわなければならないことになっている。首相と私は、つとに告訴権を行使しない肚をきめていた。それはこの事件を法廷の問題にすることは、皇室と国民の間柄を、冷たい法律とその論理によつて律することになるからである。本件が、法廷における乾いた論争の種にされるようなことは、首相にとつても私にとつても到底忍び難いことであつたからである。そこで政府は、熱湯にはいつたまま貴重な時間をかせぐことにしたのである。この告訴期限の満了する五月十日を待つ政府にとつては、その間の一日一日は正に千秋の思いであつたのである。「(『同前』)

池田首相は四月二十九日の天皇誕生日に、大平の執筆した「談話」を発表してこの問題に決着をつけることにした。談話は、事の経過を述べたあと、次のように結ばれている。

「……私は、この種の問題は、本来、皇室と国民との間柄にかかわる大切な問題で、国民の品位と名譽と文化の名において、国民全体の良識の裁きにまつべきものであると信じますが、今回のことは、関係者が、衷心から遺憾の意を公にしていることもあわせ考え、深思熟慮の末、この際としては、あえて告訴の手続きをとることなく、事態の推移を見守ることにいたしました。私は、かかる問題が日本国民の名譽と品位にかけて今後再び起こることのないよう、国民の皆さんとともに期待いたします。

私は、わが国の現状を思い、将来を考えて、今こそ新たな創造的意欲をもつて、九千三百万の国民のみなさんとともに手を携え、道義を重んじ、名譽を尊ぶ偉大な国民として、真の国民的繁栄の基礎を固めることを誓いたいと存じます。」

(同前)

四月一日には、所得倍増計画を織り込んで前年度比二十四・四%増の積極予算が成立したが、その頃から、国会の雲行きがおかしくなってきた。提出されていた法案は、防衛二法案、農業基本法案、医療二法案、厚生年金法案、ILO関係

法案などだったが、防衛二法案は四月二十九日どうにか衆議院を通過したものの、池田首相の公約だった農業基本法案は難航をきわめた。

四月二十九日、清瀬衆議院議長は議長職権で本会議を開会、自民、民社のみが出席し、社会党欠席のまま、農業基本法案は可決された。荒れた国会は、五月九日にようやく正常にもどったが、その四日後の五月十三日、自民党と民社党は共同で、新警職法といわれる『政治的暴力行為防止法案』を国会に提出した。これは一種のデモ規制法である。

大平、宮沢らの首相側近はこの法案の上程に反対したが、池田は、「お前たちは、わかっちゃあらん」と強気の態度でこれを押し進めた。そこには池田の本来持っていた高姿勢がうかがえた。法案の審議が進むにつれて国会は荒れはじめ、自民党内にも慎重論が出てきたが、池田首相は強行採決を断行して、『政法法案』は参議院に送られた。しかし参議院の松野鶴平議長ら参議院自民党幹部はこれに反対して、継続審議のやむなきにいたった。

大平官房長官はこのしばらく後、『朝日ジャーナル』誌上で、東大助教授の寺沢一（現教授）からインタビュウを受け、政法法に関して苦しい弁解をしたあと、寺沢から「ああいう反対なり、デモが起こっている状態においては、なるべくもっとわからせるようにしてから、新しい立法というものはすべきだったと思つ」と言われ、「ええ、わたしどもも、なんでもかんでも無視してまでやつちゃうんだ、というふうなことじゃなくて、いまあなたがおっしゃるような方向へ行つたほうが、問題はスムーズに解決すると思えますね」と答えた。

ここで寺沢が、「それはやはり総理のお考えと考えていいですか」と突っこむと、それに対して大平は、「えー、これはちよつと微妙ですがね。やっぱり池田さんはわたしより一〇歳上の人ですよ。池田さんや佐藤さんのジェネレーションと一つのを一〇歳年下のわたしからみると、やっぱりある種の距離を感じる、ぼくは。それで十分いつてやるけれども、最後のいよいよの決断となると、やっぱり池田さんの全人格的な決断になりますからね。とにかくいま申し上げたようなくあいにまいます」と否定的な返事をしている。

要するに止めたけれども、池田が言うことをきかなかった、というわけであらう。

六月十九日、池田首相は、それまでのトラブルを振り捨てるように、アメリカへの旅に出発した。ケネディ政権が来たことでもあり、ここで親交を深めておくことは日本にとって是非とも必要という判断に立った訪米である。

この時、大平は池田満枝夫人に同行をすすめた。満枝夫人は、「池田が総理として最初の渡米の時に、外国語はしゃべれなくてもよいからぜひ従って行きなさい」と熱心に勧めて下さったのは、他ならぬ大平さんでございます。岸総理の奥様がお体が弱くて出かけられなかつたし、私も家で留守番をしていればよいと思っておりましたのを、大平さんの強引さに負けて泣き泣き渡米に同伴をしたわけでございますが、それ以来、総理外遊の際は夫人同伴をという前例が開かれています。さすがに大平さんは創意工夫に富んだ先見の明のある政治家だったと、あとで感心した次第でございます。」と書いている(『回想録』追想編)

池田首相の訪米は成功だった。ケネディ大統領は二隻のヨットを用意して池田首相夫妻を歓迎し、会談の結果、米側が日米貿易経済ならびに日米科学技術の二つの合同委員会を定例的に開きたいと提案、日本側もこれに同意した。『日米パートナーシップ』という言葉が生まれたのもこの時である。

留守を守っていた大平官房長官はこの成果に満足したが、同時に、池田首相が例によって調子にのり、帰国時にしゃべりすぎてはと心配し、帰路立ち寄るハワイのホテルに手紙をだし、羽田についたときいい気持で手を振ったりしないこと、『反日感情』のいちばん強いのは日本なのだからアメリカで成果をあげたなどと思わないこと、凱旋將軍のようなふりをしてはならないことなどを、こまこま書いた。

ハワイに着いた池田首相はこれを読んで、同行の宮沢喜一に、「大平が女房の取越し苦労で、つまらんことを言ってきている。池田・ケネディ会談は東京でも大変な成功だと評判らしいな」と語ったが、三十日夜帰国したときには、大平の忠告どおり、手を振らずにタラップを降りた。

訪米の成功に気をよくした池田は改造人事にとりかかり、七月十三日、自民党実力者との全体会議を開き、ついで、三日間にわたり個別に会談をつづけ、その結果、まず改選期にきている党役員を決定した。大野副総裁、前尾幹事長、赤城

総務会長、田中政調会長である。このとき鈴木善幸は、筆頭副幹事長で前尾幹事長を補佐することになった。ついで、組閣に入り、河野農林、佐藤通産、藤山経済企画、川島行政管理、三木科学技術など、実力者の入閣がきまった。大平は官房長官に留任する。これで、石井派をのぞく七師団が勢揃いした。

ところで、当時の官房長官は国務大臣ではなかった。国務大臣となったのは、池田内閣退陣後の佐藤内閣で、橋本登美三郎が官房長官になった時からである。大平はこの話を聞いて、「官房長官は大臣ではない方がいいんだがな」とつぶやいた。新聞記者が「なぜですか」とたずねると、大平は答えた。

「ぼくが官房長官の時には、河野さん、佐藤さんなどの実力者が閣内にいた。実力者内閣というのは、言葉は悪いが、動物園みたいなもので、猛獣がいっぱいいる。官房長官はいわば猛獣使いで、したがって猛獣と同じ次元にはいけない。一格下の方が猛獣が怒っても、『すみません』ですむからね」。

党関係は軽量執行部と言われたが、池田は、盟友の前尾を幹事長に得、また閣内に実力者のほとんどを取り込み、政情不安を感じることなく、国政に取り組むことができるようになった。ゴルフにも待合にも行けないから、池田は週末には、箱根の別荘でせつせと庭づくりにはげむ。特に興味を持ったのは石である。いろんな石を運びこんできては、庭の前面に置きならべた。

大平は池田夫人に、「人間は年をとると石に凝るものだが、ぼくはまだ生きものの方がいいですね」と言って笑った。

第二次池田改造内閣は、東証ダウ平均が千八百二十九円と東京証券取引所開所以来の高値をつけて、その門出を祝福したが、間もなく、経済界にはあちこちに景気過熱、危険の赤信号がつきはじめた。設備投資ブームが生じて、国際収支の赤字が目立ってきた。強気の池田首相も、秋口に入ると景気調整策を指示し、九月末、公定歩合が引き上げられた。東証ダウは低落をつつげ、十月はじめには千四百円を割りこんでしまった。

こうなると、党内にも不満の気配が満ちてくる。それを加速したのが、閣内の河野農相と佐藤通産相の対立である。実

力者内閣は、たしかにいい意味での競争関係をつくりだしたが、なかでも河野農相の活躍ぶりがめざましかった、総裁選挙で池田と対立した河野が、省内の人事の刷新、闇米の自由販売、生鮮食品の価格据置きなど積極的な手を打って、池田政治の推進につとめた。池田首相も、「河野は出来るやつだ、あれは使える」と言いだすようになり、池田、佐藤関係は次第に微妙なものとなっていった。

そういう中で、十一月二日から三日間の日程で、池田訪米の際、小坂外相とラスク國務長官との間で合意された日米貿易経済合同委員会の第一回会議が、箱根で開催された。

この会議の意義について、大平はこう記している。

「もともとこの合同委員会は、具体的な問題を交渉したり取決めたりする場ではない。双方の自由な意見の交換を通して日米間の友好の絆を強化し、両国の経済関係の緊密化に寄与しようとしたものである。従って、お互い言いたいことをい、相互の立場に対する理解を深めておくことは、具体的な問題が生じた場合に、的確且つ迅速な判断と措置ができていようものである。また各種の国際経済会議に臨んだ場合に、日米双方の下打合せがすでにできているので、その場において日米協力が生かされるということも期待される。さらに日米両国の経済関係が二日ないし三日間にわたって、日米間の経済問題、日米共通の関心事の討議に没頭するということは、そのこと自体、日米両国の大きい外交的演出であり、両国民はもとより、全世界に与える影響は決して小さいものではないといえよう。」（『春風秋雨』）

大平は、このことを新聞記者には、「日本はアメリカについて四六時中考えていなければやって行けないが、アメリカには考えるべき国が何十とあり、一年に二日が三日でも、アメリカ側が日本のことだけを考えるとこのはきわめて大きい意義があるんだよ」と解説した。

この日米貿易経済合同委員会の三日前の十月三十日、大平の長女芳子と森田一の間に縁談がまとまり、津島寿一夫妻の媒酌で、パレスホテルにおいて華燭の典があげられた。森田は香川県坂出市の出身で、坂出高等学校、高松高等学校を經

て東京大学に入學、昭和三十三年大蔵省に入った前途有爲の青年官僚であり、当時は主計局総務課勤務であった。大平はつねづね、芳子について、「女の子は勉強なんかしなくてよい。可愛くて、早くお嫁に行けばよい」と言っていたので、この結婚が嬉しくなかるうはずはなかった。

明けて昭和三十七年は、参議院選挙と総裁公選の年である。だが、景気は前年から不振をつづけ、同時に最も心配されていた物価上昇傾向が顕著になってきた。当然ながら、経済成長論者と安定論者の間に激しい論争が繰り広げられるようになる。四月八日、池田首相は、参議院選挙の遊説中に、「物価値上がりは政府だけでなく国民全体の責任でもある」と演説し、マスコミの非難を浴びる。藤山経済企画庁長官が、四月十三日、経済同友会総会で高度成長よりも経済全体の均衡を強調し、「低金利政策が設備投資を刺激して、危険をまねく原因をつくった」と池田経済政策に批判を加え、政財界に大きな波紋を投げかけた。

会期末の国会はゴタゴタをつづけ、ガリオア・エロア返済、タイ特別円処理両協定はじめ六条約、選挙法改正案などの法案は通ったが、ガリオア・エロア返済を行うための産業投資特別会計法案が参議院で審議未了となり、重宗雄三参議院議長会長が責任をとって辞表を提出した。また、医療関係の法案が流れたため、水田蔵相と瀬尾厚相も辞表を出した。これら辞表は、慰留によっていずれも撤回されたが、池田体制の足もとをゆさぶる不気味な振動であった。

五月七日、どうにか国会は終わったものの、藤山発言の問題が残っている。政府は、この問題を討議するため四回の経済閣僚会議を開いたが、結局、大平官房長官が中心となつて、「今後の経済運営の基本的態度について」という藤山の言い分を盛りこんだ統一見解をまとめてケリをつけた。

総裁公選の年には、すべてが政局に結びついて行く。藤山の動きは、佐藤を刺激した。また岸派の福田起夫、倉石忠雄らもこの頃、池田体制に反発して、「党風刷新連盟」をつくった。そして、「藤山、佐藤および福田の三つの動きを足場に、国会終了の直後、クーデターによる佐藤政権樹立説が流れたことは、政界ではよく知られたことである。」(土師著『人間池田勇人』)

池田にとって幸いであったのは、一つは大野や河野が池田を強く支えたこと、もう一つは参議院選挙が迫っていたことであつた。これが派閥抗争の深刻化を防いだ。

選挙の結果、自民党の当選者は五名増の六十九名であつた。大平は藤山が、投票後、辞表を提出したので、これを慰留しに走つた。藤山自身の回想によると、この時の状況は次のとおりである。

「……いすれ閣僚を辞任しようと思ひそかに決意していたが、問題は時期だ。河野さんのいうように選挙前にやめるのはよくない。かといつて選挙の結果がわかつてからではまずい。それで、投票日の七月一日、投票の締め切り時間が過ぎた夜七時半ごろ、家にいた大平官房長官に「今から、できれば官邸で会いたい」と電話した。突然だったので大平君は「車も返してしまつたし、今日はカンニンしてくれ。明日でもいいじゃないか」と渋つた。しかし、とにかくこの夜のこの時期しか機会はない。『どうしても会つてほしい』とがんばつて官房長官を訪ねていき、『経済政策の意見の違いもある。辞めさせてもらいたい』といつて辞表を出した」(藤山著『政治わが道』)。

福田赳夫が中心となつた党風刷新連盟は、七月四日、全党に対し派閥解消を提示することを決議、これを実力者全員に申し入れた。

昭和三十七年七月十四日が総裁公選の日である。佐藤と藤山の去就が注目されたが、結局、佐藤は池田との友情を選択する方に踏み切り、また藤山も大野らの強い説得によつて、立候補を断念した。公選では、池田が三百九十一票を取つたが、白票、無効票合わせて七十五票の池田批判票が出た。

池田は、組閣の構想を練るため、箱根にこもつたが、何もまとまらずにもどつてきた。箱根から帰つて以後の様子については、田中角栄が記している。

「……池田内閣の改造の前夜、前尾繁三郎幹事長、赤城宗徳総務会長、それに政務調査会長であつた私と官房長官の大平君の四人が信濃町の池田邸に呼ばれた。(赤城総務会長は防衛庁の病院に入院中で欠席)『明日の組閣に當つてまず党幹事

長、外務大臣と大蔵大臣を三人の中で決めてみなさい」と池田さんに冒頭、言われた。池田総理が大蔵省出身であるから大蔵中心色の人事は避けて、私が大蔵大臣に、党の要の幹事長は前尾留任が至当、外務は大平と自然な形で決まった。組閣の骨が決まると組閣名簿はスフスフとできあがったのであるが、翌日になって大風が吹いた。

党の副総裁と三役を組閣参謀として総理官邸で会議が始まって、すぐ池田総理から「この案で決定したい」と名簿が示されたところ、大野伴陸副総裁から一喝が飛んだ。「この案は田中、大平連合内閣ではないか」。

私と大平君の二人は黙って席を立って官房長官室に入り、内から鍵をかけて椅子を並べて寝てしまったのである。私はちよつとムカムカしていたが、そのうち大平君は軽いいびきをかき始めていたのである。繊細で緻密な大平君にこんな図太い神経があつたのか——と、私は驚くとともに微笑んだのである。一時間程したら扉が叩かれたので総理大臣室に入つていったら、大野さんはニヤニヤ笑っていた。原案のどこかに大野副総裁が手を入れたのだ。と思ひながら、黙って池田総理から渡された確定組閣名簿を見たら、前尾幹事長、大平外務大臣と田中大蔵大臣はそのままであつた。大平君がその時、どんな顔をしていたかは今でも思い出せない。」(『回想録』追想編)

組閣は七月十八日である。

一般に組閣にあたっては、まず党三役、官房長官を決め、これらの人々が閣僚人事に参画するのが普通である。だが、この時の人事は、前記の田中の文章のようなプロセスで決定され、新官房長官の黒金泰美は参画していなかった。組閣はむろん、総理の意志によって決まるものであるが、通例の手續きによらなかった点、池田の大平、田中への強い信頼ぶりがうかがわれる。

首相と官房長官は、一心同体でなければならないと言われる。おそらく、池田と大平のコンビほど、このことをよく実証したものはなかったであろう。この間の消息を最もよく伝えるものの一つは、大平会のメンバーであつた田中外次(現住友金屬鉱山相談役)の次のような文章である。

「……池田さんの七回忌の頃であつたらうか、大平会の席上でわれわれはこもこも池田さんの遺徳を偲んでいたが、大平

さんは相変わらず聞き手に回っておられるので、「大平さん、何かご感想を」と誰かがいうと、やあ重い口から「私はいわば池田のはらわたのなかで生活していたようなものですから、他人のことをいうようにお話しすることはできないのです。ご勘弁下さい」といわれた。」『回想録』追想編（